

大槻玄沢・志村弘強編 『環海異聞』 本文確定の基礎的研究

岩井憲幸

A Study Regarding the Text of Ōtsuki Gentaku and Shimura Kōkyō's *Kankai-ibun*, 1807

IWAI Noriyuki

The purpose of this paper is to propose a currently available way to obtain the best text of *Kankai-ibun*, the original manuscript of which has been lost. *Kankai-ibun* is a full report on the experiences of 16 sailors of the Sendai Clan over the years 1793-1803, during which time they were cast adrift, landed in Russian territory, remained there for some time, and finally returned to Japan via both the Atlantic and Pacific Oceans. Four of the men were returned to Japan by Nikoraj Rezanov, the second envoy to Japan from Russia, after Adam Laksman. They traveled on a ship under the command of Ivan Fyodorovich Kruzenshtern, the commander of a Russian fleet that was attempting the first Russian circumnavigation of the globe. It would be the first circumnavigation, as well, for any Japanese. After reaching Japan and having been refused in his bid for trade negotiations, Rezanov handed over the four Japanese sailors to the authorities, and in 1805, he left Japan.

In Edo, end in December, 1803, the sailors were interrogated for more than 40 days by Ōtsuki Gentaku, a court physician of the Sendai Clan and a famous *rangakusha* (a scholar undertaking the study of Western sciences by means of the Dutch language), as well as by Shimura Kōkyō, a Confucian scholar, also of the Sendai Clan. In February, 1804, Gentaku and Kōkyō produced a rough-draft report, but Gentaku was unsatisfied with it, and it was not until May, 1807, that a full report, the product of continued investigations and repeated rewritings, was completed and presented to the Clan. It was entitled *Kankai-ibun*, consisted of 16 volumes, and reportedly contained 115 beautiful illustrations. Unfortunately, this original manuscript was later lost.

There are over 50 manuscript copies in existence today. *Kankai-ibun* texts have been printed several times since the Meiji period, but the authenticity of their sources is in doubt. From among a number of well-preserved manuscripts, I have selected three for particular study: one owned by the Miyagi Prefectural Library (=D), one owned by the Ichinoseki City Museum (=J), and one owned by the Aijitsu Collection in Ōsaka (=A). A is famous for having been granted to Yamagata Shigeyoshi, a merchant under Sendai Clan patronage in Ōsaka, but it has been little studied, and it has been of particular interest for the purposes of this paper.

Briefly expressed, the major features of the three manuscripts are as follows;

A: officially copied from the original, given to Shigeyoshi by the Lord of Sendai in 1808, i.e., only one year after Gentaku had presented that original to the Clan. The text-lettering is in the official-copyist style, and the text contains a few lacunae, including words regarding sexual relations and illustrations related to Christianity, which were intentionally omitted by the copyists.

D: evaluated as being next-best to the original, with many fine illustrations. While the text contains, unfortunately, many worm-eaten parts, it has no lacunae and has only rarely undergone any revision.

I: recopied from a manuscript that had been copied from Gentaku's duplicate of the original. That manuscript had been produced by Ôtsuki Bankei, Gentaku's son, who presented it to Itô Genboku, a famous *rangakusha*, to express Bankei's gratitude for financial help. The text of *I* is, generally speaking, similar to that of *A*, and from this we may imagine that it provides a reasonably accurate reflection of the original compiled by Gentaku.

Among the *A*, *D*, and *I* texts, there are no passages or individual words which reflect different meanings, and it would seem safe to assume that we can currently obtain the best *Kankai-ibun* text by emending on the basis of a comparison of *A* with *D*.

大槻玄沢・志村弘強編『環海異聞』本文確定の基礎的研究

岩井憲幸

一 はじめに 本稿は、文化四年（一八〇七）成立の『環海異聞』が比較的多数（注1）今日迄伝存してはいるものの、いわば原本というべき書が現存不明であり、従って最良の本文翻刻（注2）がなされていないという現状に対し、最良の本文を確定する為の第一段階を模索した報告である。ここでは、従来あまり知られていなかった愛日文庫所蔵本につき詳しく述べ、この書を中心に加え、さらに善本と目される宮城県図書館所蔵旧伊達家本・一関市博物館所蔵本（注3）との比較を通じて、愛日文庫本が『環海異聞』の本文確定にとり必須の書であることを示す。紙幅が限られているゆえ、『環海異聞』の成立事情等々は諸家の研究（注4）に任せ、かつ既知のものとして不問に付し、即課題に入る。以下では上記三本をそれぞれ愛日本（略号A）・旧伊達家本（D）・一関本（I）と適宜略称する。

二 愛日本の書誌 大阪の市立開平小学校に存する愛日教育会所蔵の『環海異聞』（A）については海野一隆氏による〈資料紹介〉がある（注5）が、従来あまり知られていなかった故、重複を厭わずやや詳しく記す。

(1)通番号・130(1)～(16)、木崎番号288（注6）

(2) 著者・大槻茂質・志村弘強編（注7）
(3) 冊数等・美濃判十六冊、即ち〈序例附言〉の首巻一冊、〈巻之一〉～〈巻之十五〉迄十五冊。

(4) 成立・文化四年（一八〇七）序

(5) 刊・写、装幀・写、和装本、四針眼、袋綴

(6) 書名等・内題に〈環海異聞巻之一〉のようにある。

(7) 本文体裁・每半葉八行取り、注双行。挿図多数（別表参照）

(8) 各巻紙数・別表参照。なお丁付けなし。

(9) 印類・『愛日文庫目録』によれば〈思貽堂圖書記〉（注8）

(10) 箱書等・二重の木箱に保存。外箱蓋才に中央より左へ〈環海異聞 全十六巻／維文化五年歲次戊辰／季冬從／仙臺君拝領／重

芳謹記〉、内箱蓋才中央に〈環海異聞 十六冊〉、内箱内押さえ板才には書名を中央に配し、右より〈文化五年歲次戊辰季冬從／仙臺君拝領／環海異聞 全十六巻／思貽堂重芳謹記〉と、それぞれ

墨書が存する。
いくつかの項目につき補う。(3)の〈美濃判〉だが、実際は第一冊目〈序例附言〉において二六、七×一九三センチ前後。(4)成立は〈序例附言〉三六才に〈文化四年丁卯初夏 醫臣大槻茂質謹識〉とある。(6)

についてはやや説明を要する。各冊は拝領直後に施されたと推量される保護表紙に嚴重に包まれ、かつ題簽も貼られているが書名を欠く。原装の表紙は紺地で、書き題簽を有するものと思われるが、確認できず。全冊に施されている保護表紙は、書冊全体をくるみ込み、かつ所要所糊づけされている。この保護表紙は上端に龍をあしらった紋様が薄青で刷られおり、右端に貼られた題簽紙にも双龍で枠をなす紋様が薄赤で刷られものを用いる。題簽にはすべて書名が大書されておらず、右下隅に〈序例附言〉(一)……の如く小書きがある。これが筆によるかペンによるか不明。さらに保護表紙左下隅にペン(鴛ペンか)により〈mok. 1〉(巻一)……〈Bind. 15〉の文字が直書きされている。〈1〉の字形は大文字の〈J〉を用いる。蘭学者流である。保護表紙の仕立てとペン書きは山片重芳によるものであろう。なお、保護表紙右端には後代の図書ラベルが全冊に貼付される。(10)の箱書だが、内箱蓋を除去、他は山片重芳による直書きとみられる。(文化五年……冬)は重要な年紀の記述で、(4)の補記中の〈文化四年……初夏〉脱稿時から早くも一年半程後に山片は拝領したことになる。蛇足だが、重芳は大坂の豪商山片家の四代目当主であり、山片蟠桃はその番頭職にあつた。重芳は好学でも知られ、蟠桃は『夢の代』の著述をもつ学者でもあつた。同家は二代重賢の時、仙台藩の蔵元となり、四代重芳にあつては殊に仙台藩との格別な結び付きを有していたようで、商売上のみならず、種々の海外情報をも得ていた様子が現存資料からうかがえるのである。

三 愛日本の本文と丁数 愛日本の各巻は、それぞれ一冊仕立てになつてゐることは上述したが、その本文の構成はどうであらうか。

第一冊〈序例附言〉の巻首には次のようにある。

環海異聞 序列附言

同36オにはこうある。(丁数は私に算えた)。

文化四年丁卯初夏 醫臣大槻茂質謹識

さらに巻尾42ウには次のようにある。

総計拾五巻 （巻序例目錄考）從寛政五年癸丑文化三年乙丑
共拾六卷四一頁五十五
拾三年となる也

後二者の記述から本書の成立と編者が知られるのだが、編者については大槻のみで、序例本文中に志村の名が記されている点は注意すべきである。拙稿では草稿本を重視し、大槻の単著とはみず両人の著作とみる。

37オ以下には〈目次〉と題する記述が続く。全体の内容を知るに簡便であり、かつ後述の挿図の数も記すので以下全体を引用する。

目次

巻之一

寛政五年癸丑石巻出帆後難風に逢ひ「数ヶ月漂流し甲寅六月オンデレイツケといふ島に漂着しナーツカといふ湊に」老ヶ年ナツケに向んとして滞留せし記 三圖

巻之二

ナーツカ滞留中の記并に魯西亜船の「護送を得て乙卯四月此湊を發し」其本領の内地オホーツカといふ湊に「着岸し数日逗留其八月より翌丙辰」の年迄拾五人之者共追々三ヶ度に「オホーツカ出立ヤーツカといふ處に」到るまでの道中記 拾五圖

巻之三

ヤーツカ江着暫く滞留夫よりイルコーツカ「迄被送届惣人数追々丙寅十二月」同所に相會せし迄の道中記并に「此所に数

一(37ウ)

一(37オ)

年足を止る事になりたる記

八ヶ年滞留中紀事分類

街衢居室

第一 七圖

卷之四

飲食

第二

〔(38オ)〕

服飾

第三 卅圖

卷之五

寺觀道教

第四

産育及赤子命名

第五 六圖

婚

第六

卷之六

葬

第七

祭

第八

〔(38ウ)〕

衙廳並官名職掌政治兵卒武備

第九

刑獄

第十

錢貨 錢鈔

第十一 三圖

卷之七

尺度并里程

第十二

秤量

第十三

樂器

第十四 五圖

氣令

第十五

耕農

第十六

交易

第十七

醫療

第十八 三圖

物産

第十九

數量

第二十

土俗風習

第二十一

卷之八

言辭

第二十二

天文

地理本國地名

時令

人倫

身體

居室

動物

器財

衣服織段

飲食

言辭 二圖

各門譯語並二名物ノ解其下ニ譯セリ

卷之九

癸亥の年三月王命下りて拾三人の者〔(40オ)〕イルコーツカ出

立七千里の道中へ首途し〔舊都ムスクワを経て新都府ペトル

ブルカ江〕到れる道中の記并旅館滞留中の記〔これ享和三年也

卷之十

國王江目見以来の次オ并に都下巡覽の記

六圖

卷之十一

都府滞留中の記二

〔(40ウ)〕

此所にて發儀儀平等四人の者日本使節船同伴帰朝すへき旨

申渡され出立してカナスタといふ港より大船に乗組迄

の記 九圖

卷之十二

六月十六日カナスタ出帆デ第那馬カ加とインゲリア諸厄利亞江舟を泊め

加那里亞カ岬嶋江船を〔(41オ)〕寄せ夫より赤道直下の海上を經過

し〔南亞墨利加洲アメリカ伯西尼の内エカテリイナ〕湊江着岸の海路及

同所滞留出帆して其大洲の岬を乗廻し西海に向ひし迄の

記 三圖

卷之十三

甲子統四月下旬マルケイサといふ裸〔ハダカ〕寫江舟を繫カけ此所を發し

〔(39ウ)〕

て再び」(41ウ) 赤道直下を西に距りサイベイツケ島を歴^ハ夫より北亜墨利加洲^{アメリカ}を右にして亜細亜^{アジア}洲なる魯西亜領分の畫境カミシヤーツカ^{カミシヤーツカ}といふ湊江七月初旬着岸の海路并に」同所数日逗留用意整ひ八月五日出帆」蝦夷地より日本の東南にあたる大洋を」渡海し薩摩海江向ひ九月初旬肥前」長崎江入津迄の

記 五圖 (42オ)

卷之十四

長崎港入船上陸後の次弟並乙丑^丑三月御奉行所御請取迄之

記

卷之十五

往來滞留前後の間の雜事

以上(目次)の末に上に引いた巻尾(42ウ)の引用文が総括として記されている。ここで図をへ二百十五^{十五}としていることに注意されたい。次に各冊の丁数であるが、次表のようである。ここでは墨付が半丁の場合も一丁と算した。表中の丁数は比較の便を考えアラビア数字を用いる。単純に加算すれば全十六冊で全五六〇丁となる。又、最終巻がもつとも厚いことが容易にみてとれよう。

卷	A丁数	D丁数	I丁数	備考
序例附言	42	42	42	
卷之一	34	34	34	
卷之二	33	33	33	
卷之三	33	33	33	
卷之四	34	34	34	
卷之五	34	34	34	
卷之六	36	36	36	

卷	A丁数	D丁数	I丁数	備考
卷之七	34	34	34	
卷之八	30	30	30	
卷之九	36	36	36	
卷之十	32	32	31	*
卷之十一	34	34	34	
卷之十二	33	33	33	
卷之十三	31	31	31	
卷之十四	36	36	36	
卷之十五	68	68	70	*

注 * 卷之十においてIが(31)であるのは、A・Dが32オに(環海異聞卷之十終)と記すのに対し、Iはこれを欠き、白紙が続くゆえ、算えなかつたためである。* 卷之十五の(70)は、上述の跋・後書き2葉分を算えたからである。実の処、三本共に本文は各半葉末の文字がすべて一致する。

四 愛日本の挿図 『環海異聞』は本文中に説明の為に挿入された図

の豊富なことでも知られる。後述するような理由でも重要ゆえ、次に煩を厭わず一覽を掲出する。概して、図は見開き二丁、半丁、本文中の小図の別を有するが、タイトルを有する場合はこれを引用し、無い場合は「」を付して筆者の命名による題名を掲げる。(欠)を不在を示す。なお、ここには地図・文字表等も含めるものとする。題名中(…)は省略である。又、下方の欄は後に問題とするものであるが、愛日本(A)に掲載する図が旧伊達家本(D)・一関本(I)にも存在するか否かを比較する項である。存在は○、存在するが重要点で異なるを示す場合は△、存在しないは×で表示する。備考欄には注のあることを*で示すが、写本間で多数の差違が認められるものの、最小限の言及に留める。

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	通し 番号	
					卷之二				卷之二			序例 附言	卷	
7ウ	6ウ 7オ	5ウ 6オ	5ウ	4ウ	4オ	34ウ	30ウ 8	28ウ 29オ	28オ	33オ	32ウ	4ウ 5ウ	丁	
皮船全図	嶋人：皮船に乗り：狐をなす図	セイウチ圖	嶋の婦人「の鼻・耳飾り」全図／衣服の縫目「に飾るオクチヨの贅」図／紡錘之図	額上頭圍にはめる冠り物の圖	島人男女並少女之圖	オクチヨ鳥之圖	「楫の図」	コージキ圖	オンデレイツケ島穴居并嶋人其土室出入之図	又一體	魯西亜國字	魯西亜使節船本朝江渡海せし船路於長崎書キ上ケしといふ図	題名	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	D	存 否
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	I	備 考
												*		

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	通し 番号	
					卷之三										卷	
29オ 5	28オ	27ウ	27オ	9オ	4ウ 5オ	32オ	27オ	26ウ	21ウ 22オ	20ウ	16ウ 17オ	9ウ	8ウ 9オ	8オ	丁	
「厠の穴の図」	椅子圖	ベイチ全圖	ベイチの下地	セイチカ圖	人の乗たる雪車を四疋の馬にて河水の上を牽する図	アウタンより以西人家土室圖	ぜりワチカ圖／荷を固り結びめをわなにしたる圖／馬に荷を駄したる圖	旅行用意せし人の圖	犬に荷を積たる雪車を為し牽図	オホーツカ家屋圖	冰山圖	「墓標の図」(欠)	ナアツカ魯西亜人居處圖	「蓑全圖」／蓑を使ふ手法の圖／頭迄冠る皮衣全圖	題名	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	D	存 否
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	I	備 考
													*			

44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32		31		30	29	番号通し	
														卷之四					巻
26ウ	26オ	25ウ	25オ	24ウ	24ウ	23ウ	23オ	22ウ	22オ	21ウ	21オ	14オ		13ウ		32ウ 33オ	32オ	丁	
〔同〕背	ヲリバシカ	〔同〕背	ガミゾ	〔同〕背	フハイカノ〔その紋様の図〕	〔同〕背面	カミゾー	〔同〕背面	ヲリパーシカ	カリパーカ	カリトース	食盤三ツ道具図		牛肉等入れて灶に入れ煮る瓶の圖／瓶をのせて籠の内へ出し入れする鉄器の圖		浴室の登る店の図／小桶・桜の葉付の枝筥の圖／焼石に水を：圖	浴室圖	題名	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	D	存否
○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	I	
					*		*		*		*								備考

	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	番号通し		
																			巻	
																			巻之五	
		6ウ	6オ	34オ	33ウ	33オ	32ウ	32オ	31ウ	31オ	30ウ	30オ	29ウ	29オ	28ウ	28オ	27ウ	27オ	丁	
図	鐘樓の内にて数々の鐘を手足にて拍子よくふりならず	鐘樓圖	ヲチセアラ	ポロケンツカ	チヨロケ／シヤーカー	〔同〕背	シタノイ	〔同〕背	シ子リ	〔同〕背	シタノイ	〔同〕背	シ子リ	〔同〕背	シタノイ／ピラスケニツ	〔同〕背	シタノイ	シタノイ	題名	
	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	△	△	○	○	○	○	△		D	存否
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○		I	
							*				*	*	*		*		*		備考	

76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	通し 番号	
					卷之七					卷之六					卷	
16 オ	8 ウ	8 オ	7 ウ	6 オ	1 ウ 4	35 オ	33 オ 1	31 ウ 7	15 オ	10 ウ 11 オ	14 ウ	13 ウ	9 ウ 10 オ	9 オ	丁	
ソーボリ <small>結</small> 圖	パライカ	ドウチカ／ケレプロ	ゴーシケ	〔法馬の圖〕	〔曲りかねの圖〕(欠)	當十錢／ゼニシカ／スエレ プロ	金錢「の大きさを示す円形」	〔銀貨中の十字〕	龍吐水に皮袋をつけたる火 消道具／木造りの家横木を引 かけ取崩す道具	〔衛兵立番の圖〕	轉車の斗 <small>マス</small> に人を乗せて旋轉 する戲の圖	冠帽圖	同堂内圖	大寺表面圖	題名	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	D	存 否
○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	I	備 考
					*								*	*		

94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	通し 番号	
							卷之十一					卷之十			卷之九		卷之八	通し 番号	
25 ウ 26 オ	19 オ	13 ウ 14 オ	9 ウ	7 ウ 8 オ	6 ウ	5 ウ 6 オ	3 ウ	31 ウ	30 ウ 31 オ	14 ウ 15 オ	13 オ	10 ウ 11 オ	15 ウ 2	13 ウ 14 オ	10 ウ 11 オ	20 オ	18 ウ	丁	
〔食盤上の小人の圖〕	〔ペトル イチ王像〕	市中大戲場圖	蘭書所載ウラルテルボーム <small>坂</small> 圖	〔異木の〕圖	〔鉢植三種の圖〕	〔鉢植物の室の圖〕	街衢圖	〔天象を示せるもの〕	天地地球の圖	風船飛走圖	シヤリ圖	魯西亜當國帝夫婦肖像	〔鑿而鞞人の帽子の形の圖〕 <small>カウツ</small>	風扇之圖	車馬圖	十露盤	ハナレ「二種の圖」	題名	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	D	存 否
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	I	備 考
												*							

112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	番号 通し
							卷之十四						卷之十三			卷之十二		卷
24 オ	17 ウ	15 ウ 16 ウ	14 ウ 後2	14 ウ 後3	14 ウ	13 ウ 14 オ	12 ウ	19 ウ 20 オ	13 ウ	8 ウ 9 オ	7 ウ	7 オ	3 オ 4	27 オ	24 ウ	23 オ	29 ウ 30 オ	丁
ニコラ レサノツト	魯西亜人客館図	魯西亜船入津図	〔笏の図〕	〔宝器の図〕	魯西亜國船印小旗図	長崎湊口図	〔オロシア船頭部屋平面図〕	パウラツケガワ湊圖	サンペイツケ嶋人男女圖	マルケイサ嶋松図	島人男女圖	鯨器圖 <small>イシメトク</small>	〔鉄箍の断ち切れの大きさの 図〕	ガルカルゼル図	〔亀に似たる魚の図〕	〔バナナの図〕	加那斯達湊築出しの図 <small>カナヌダ</small>	題名
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	D
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	I
*																		備考

123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	番号 通し
					卷之十五						卷
67 オ 4	45 ウ 46 オ	42 ウ 43 オ	11 ウ 7	8 ウ 9 オ	7 ウ	26 ウ	26 オ	25 ウ	25 オ	24 ウ	丁
〔光太夫の い う 斗 の 図〕	〔水車による 製材所の図〕	新造軍船圖	〔箭の鎌の図〕	拔乙蛤鹿湖漁獵圖 <small>バイカ</small>	〔オロシア本領惣國全圖よ りの写し〕	オ、ストロ	冠帽〔八種〕	同背面	〔歩卒 の図〕	上案針役ラートマノフ	題名
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	D
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	I
*											備考

注 (*の下は通し番号を示す)

- *1. A・Iは〔赤道〕の文字のみ示され、それを示す実線が描かれず。Dはともにあり。 *16. A・Iは説明の文字のみにて、描線なし。Dともにあり。 *33~59. 総題として20ウ末に〔漂客帶來冠帽衣服諸圖 共廿八〕とある。 *35. D題名中〔ハ〕に濁点と半濁点が重なる。 *37. D・I〔ガミゾー〕。 *39. I折返しあり。 *40. A・Dなし。 *45. D折返しあり。 A・Iなし。 *47. A・D・I折返しあり。 *49. I折返しあり。 A・Dなし。 *50. D折返しあり。 A・Iなし。かつAは肩掛けなしで描かれる。 Aに不審紙あり。 *51. D折返しあり。 A・Iなし。 *55. D折返しあり。 A・Iなし。 *62・63. 総題として8ウ1に〔寺院之圖〕とあり。 *71. A図なく、

重芳の貼紙（此圖落字）あり。I（図欠）と小書きする。* 82 I
 2 図ともに背景描かれず。* 112、116 総題として23ウに（使節レサ
 ノット等之像／＼冠帽諸図）とある。

図の数は（序例附言）で（一百十五）とするが、表に示したように小
 さな図を含めるとこの数を上まわる。又、愛日本と他本の間、問題
 にしなければならぬ点がいくつか存在する（後述）。

五 洋字の問題 本文中、ロシア文字やラテン文字の洋字が行中に書
 かれる場合、少なくとも愛日本にあっては写し手は原則的に別の人物
 であったように看取される。恐らくは多少洋文字に通じている人物が
 任に当たる要があったのだろう。このようなケースを掲げてみると次
 表のようになる。（ルビは問題のある箇所のみ表示、他は省略して引
 用）。

通し 番号	卷丁行	A	D	I	備考
1	序例附言33ウ8	АЛЕКСИМОВЪ [Эрчуфの筆記体] [ウの筆記体と]ウ	АЛЕКСИМОВЪ (Aに同) (Aに同)	(Dに同) (Aに同) (Aに同)	*
2	34オ1				*
3	ウ 4・5		КРОНИНТАМЪ (Aに同)	(Aに同)	*
4	卷之十一 32オ7	(欠)		(欠)	*
5	卷之十二 32ウ8	н м п	М MAN	□ (虫損)	*
6	33オ1	Thobayley London 26864, ГОЛАНД. НОВ. ГОЛЛАНДИЯ.	Thobayley London 26864. ГОЛАНД. НОВ. ГОЛЛАНДИЯ.	Thobayley London 26864. ГОЛАНД. НОВ. ГОЛЛАНДИЯ.	
7	卷之十五 17ウ2				
8	22オ3				
9	22オ4				
10	ウ 5 / 6	(欠)	Г.	(欠)	
11	ウ 7	(欠)	С.	(欠)	

注 * 1・2・3・5 原文縦書き。* 2 第1字存疑。* 4 Aはルビとして（コロンシタト）とあり、本文空白。その箇所に重芳による（此處蠻字可
 有乎）の貼紙あり。D（コロンシタト）のルビと右表のロシア文字あり。Iルビのみ。* 6 A原文縦書き。

六 旧伊達家本と一関本 現在宮城県図書館に蔵される旧伊達家本は、前述のごとく県の指定文化財に登録されているが、元は伊達伯爵家観瀾閣に蔵されていた。玄沢によって藩に提出された原本の存否を確認できぬ今、この書は玄沢上呈本に次ぐ書とみなされている。一方、一関本は、近時の購入というが、大槻磐溪が家蔵の玄沢自筆本を写して伊東玄朴に贈ったものと考えられている。

一般的にみて、玄沢自筆本は完成時に藩に提出され、後、写し方と称される専門家により通常正・副一揃いづつが浄書献上されると考える。(『官途要録』^(注1) 第二冊によれば、玄沢の提出は文化四年五月九日だったようである。)この流れにおいて、愛日本・旧伊達家本はどの位置にあり、又一関本という大槻家の家蔵玄沢自筆本と、文化四年、藩に提出した玄沢自筆本とは同一か否か、の検討が必要となる。

本文確定の為に不可欠な作業であろう。なお筆者が一関本に関心を寄せたのは、洋学者が洋学者に対して写本を行なう場合、どのような態度が筆写に反映されるかを知らたかったためである。愛日本は全体的印象を一言でいえば、上品な精写浄書本であろう。旧伊達家本と比較するとそのことがより明白となる。しかし両者は本文に関してどうであろうか。

これらの点を検討する前に旧伊達家本と一関本につき、書誌を略記せねばならない。前者については濱田直嗣氏の報告書^(註12)より摘記する。(原文横書き。今、縦書きに変更して引用)

『環海異聞』15巻・首1巻 大槻玄沢、志村弘強編著 筆写本

16冊(3帙) 伊達伯観瀾閣図書印 宮城県図書館伊達文庫印

挿図・彩色画(一部墨画) 原本は文化4年(1807)夏脱稿 同年

秋伊達家へ献上(現存の伝存は不明)「中略」^(註13)美濃判 和装

本 袋綴 各27.2×18.9cm 巻首序例目録一卷 共16巻 115図

上掲引用文の次に各巻の内容が示され、さらに〈特記事項〉中に次の

一文をみる。

図様に関しては巻十、巻十四の描写は特に精密で、出来の良い巻とされる「中略」。なお、各巻の内容に準じて行数・文字数などの様式は異なるが、書体、図様はほぼ同種と見られ、各一人、多くとも二人による筆写と考えられる。

「環海異聞」の善本は、内閣文庫本(文政12年書写・小柴直裕)、早稲田大学大槻文庫本、大阪愛日文庫本、京都大学本、一関博物館本が知られるが、和綴じ本、十六冊、彩色挿絵の、体裁もほぼ同じな当宮城県図書館本はこれらと比較しても、遜色のない内容を持つものであり、貴重な存在といえる。大槻玄沢らが脱稿して間もない文化3年秋、仙台藩に献上したといわれる遺品の現存確認ができない現状にあつて、伊達伯爵観瀾閣図書に属していた当本は、献上本に次ぐ位置にあると考えることが出来る。更に、宮城県内に現存する「環海異聞」としては、最上位の内容と体裁を保つものである。(以下略)

補記するが全十六冊中五冊を除き、他は和紙一枚を前後の保護表紙として施す。元来全冊がそうであつたらう。これに直書きで書名を墨書する。元表紙は明るい茶色で、左に金を散らした短冊を題簽とし、書名を墨書。観瀾閣の印類は各巻首右に認められる。残念ながら虫損が多数かつ随所にみられる。挿図はきわめて細密で、淡彩をほどこし上品である。なお各冊本文前に遊び紙一葉を施す。さらになお、巻之一に綴じ違いがある(後代のものか)。

一関本は、平成十九年特別展カタログ^(註14)に依ると、次のようにある。

環海異聞 大槻玄沢撰 紙本墨書 手彩図 16冊 縦26.8

18.4 文化4年(1807)成稿 「解説上略」この写本は、磐溪が家蔵

の玄沢自筆本を写して伊東玄朴に贈ったものである。

カタログ十四ページには本書がカラーで掲載され、十六冊揃い全体とロシア皇帝皇后肖像の見開き、観覧車の図の計二点が示されている。

ここでも補記する。近時購入したとのことで、すべて本文は洗浄後裏付ちされている。よって上下やや切断される。すなわち補修済み。かつ巻之八末付近に再製本時の綴じ違いあり。各冊とも表紙は明るい紺。書き題簽にて元来のものであろう。各冊巻首のど下に「本姓佐野」角田來□の印顆を有する。(末字不読)。全体を通して行草体多く、末に従い草書的な字体が増加する。全体からみて善本といえよう。ただこの一関本の最大の特徴は、写本の成立事情をあかす次のような跋文等を有することである。第一に巻十六末才に五行に亘り次のようにある。

右此環海異聞一部十六卷伊藤氏元所藏也不佞有故為佐野氏手寫焉
年將晚繁事之際故○書或至五十紙因墨痕不勝見汗顏々々元驚窓
外史

同ウに十行、さらに次葉才に五行が存する。前記引用文とは一見手が異なる。

近日余貧甚冲齋伊東君為出數十金盡償負一債而不問返完之期
義氣曠懷今世安得此人哉」銘心之餘自述五絶句以申謝悃時中
元前二日也

感泣滂々欲濕巾救窮恩不減君親錐刀爭利滔々」是曠達如君有幾
人」

滿街燈火近蘭盆奔走依稀歲事紛討鬼今宵容易」散不須更造送窮
文」

半生崑路太崢嶸今日緣君特地平一片猶餘豪氣」在山河萬里可橫
行」(ウ)

也無剥啄到柴門一枕清風午夢閑自咲先生窮未了留將文債重於山」
炎威漸退葛衣清秋動庭梧葉上聲只合深宵貪誦」讀十年燈火報君

情蓋此詩在寧靜閣文中」

辱愛 盤溪 大槻崇拝草」(オ)

さらにウに次の十行がある。

大槻茂質元之環海異聞冲齋伊東氏之所藏也其書」則茂質之手書其繪
則男大槻磐」溪之所圖矣往磐」溪有世路之急懇諸伊東氏伊東氏即
為出數十金」以救之以故至今磐溪之得全業者頼獨伊東氏之」恩矣
後磐溪返金而不受因贈致此書一部請謝恩」義冲齋容之今藏伊東氏
此之故也予與冲齋有故」獲聞傳來之由并借其謄寫之也因又記記
由」於尾亦錄磐溪當時之詩以實其事而已矣」

安政乙卯年春正月 櫻岳居士書」(ウ)

さてこの三つの文章をどう解するべきか。配置の順、筆跡の二点から次のように考える。

(一) 第一の跋文と第二・第三の後書との二群に分けるが、すべて同筆とみる。第一の跋文は写し手本人の手が前面に出たケースと考える。(二) 第一の跋文は伊東氏所藏本の写し手(驚窓外史)が時間に追われて佐野氏の為に書写したことを言う。従って現一関本は伊東氏所藏本の写しである。(三) 第二・第三の後書中、第二の詩文は第三の後書のいわば証拠である。第三の後書は重要で、大槻家家藏本(注15)は玄沢の手書、その息・磐溪の図からなる。この家藏本から、おそらく磐溪が、伊東氏に一写本十六冊を製したと、筆者は考える。これが伊東氏所藏本であろう。さらに、伊東氏所藏本の由来を櫻岳居士が聞いており、又後者もこれを借写した。その由を安政二年(一八五五)に誌した。この後書(第二・第三)は、伊東氏本に誌されてあつたのではないか、そこ迄を跋文に出る写し手、驚窓外史は書写したのではないのであろうか。別の考え方も存在するだろうが、ここではかく推量しておく。いずれにせよ、一関本は伊東本そのものではなく、伊東本の写本と見るべきであろう。しかし大槻家家藏本の面影をとどめて

いる点で重要な写本である。

七 本文の異同 さて、もつとも肝要である本文だが、そこにはどのような問題が潜んでいるのだろうか。すなわち具体的な異同はどうであろうか。ここでは巻之八につき、例示する。^(注16) 愛日本を基準とし、旧伊達家本(D)、一関本(I)と対比すると本節末の別表のようになる。

本文確定上、もつとも問題となるのは(a)欠文あるいは項目の欠落であろう。通し番号49の愛日本における欠落は、献上本原本から公式に書写された際、意図的になされたとみられる。逆に、愛日本が(仙臺君)が見たであろう本に極めて近い写本であることを証するともとれる。一方、71の場合はDにのみ存し、愛日本・Iに欠落している理由はわからない。語彙集の最後の位置にあること、部門分けにこの項目があわないこと、直前のグループが日本語にロシア語の順で立項するのに対し、その逆の立項である点からみて、後に巻之七の本文中から拾いあげて加筆されたものであろう。(なお内閣本(函架番号二七一・七)にあるが、早大大槻本にはない)。大槻の原本には本来存在しなかつた可能性がある。

上記(a)ほど重要性がないものとして、(b)主要部分以外の脱落、これに含められるかも知れない(c)ルビの脱落があり、これらには恣意性が感じられる。さらに単純なものとして(d)軽微な変更、(e)スペースの誤認がある。これらの例を通し番号で示せば次の通りである。

- (b) 1・2・42・43・47・49・52・63・64 (c) 8・22 (d) 38
(e) 59・62

次に問題となるのは、数量の点で多くみられるところの(f)半濁点・濁点の混同、および(g)清・濁音表記の異なりである。これらは当時の日本語表記のルースさと、対象が未知の外国語であることに起因する

不可避的現象といえよう。次のように多数にのぼる。

- (f) 6・13・15・19・21・23・24・28・30・31・37・38・54・56・57・58・67・68・70 (g) 14・16・17・20・25・29・33・46・48・51・53・55・60・70

第三の問題は(h)字形の相似による混同・誤写であり、巻之八の場合、ロシア語表記に用いられる片仮名でのケースが目立つ。例 ロ／コ(通し番号4)、ス／フ(5)、コ／ク(9)、テ／ラ(11・22・41・61・65・66)、ツ／ワ(12)、ク／タ(13・44)、ナ／チ(18)、ラ／ウ(23)、テ／ケ(27)、ツ／フ(34)、ソ／ツ(36)、ウ／ワ(45)・52、ニ／ヒ(50)、テ／チ(69)、子／と(32)

これに準ずるものとして、(i)くずし字に起因する異なり(39・73)がある。さらに、最終的には同一と認めてよい漢字における(j)同字(10・22・72)あるいは一種の異体字(35)のケース、仮名における(k)片仮名・平仮名の変更(26・40)がある。以上、第二の問題以降、ロシア語を扱うという本書の性格上、注意を要するのは(f)(g)(h)である。

巻之八以外につき、若干本文にかかわる問題を取り上げておきたい。語句に関するものとして、(序例附言) 35ウ4にでる(張三李四)を(朝三暮四)と誤まる写本が存するが^(注17)、本文確定作業上論外と言わざるをえない。本書では方言に言及する条も多いが、ここでは方言と明記せず本文に紛れ込んでいる例を紹介したい。巻之九のうち馬車の車輪を説明する文中に次のようである。(愛日本による。7才)

前なる小輪ハ後輪の半分程あり此小輪に付きて上の方につづく出て有り其づく三ツッだけは上へ向ふなりこれ故其車輪下タへ落着ク所ハ後の大輪と同等になる也扱づくの上ハ撞木形(木形)のうで木ありて是を前なる馬の胸の前へ施す

又この続きの末の条にこうある。(9ウ)

又前の車輪を一ツにして小くしたるハ直行したる車右往か左往かに横にめぐらさんとする時づくの所の旋轉によりて自由をなす様に工夫したる物と見ゆ

上記引用文中に現われる「づく」の語は、大友喜作校訂本が採用する「ぢく」であろう。校訂注がなく詳細は不明だが、「軸」の訛り、すなわち方言形であると考ええる。石井研堂校訂本の諸本は、ほとんど原形「づく」を採用している。池田皓現代語訳では「銑」をあて、これを参照したものがゴレグリヤードのロシア語訳本(註18)は〈Сутынная (Солванка)〉の訳語を用いる。「銑」は普通、銑鉄を言うが、ここでは銑鉄製の部品を意味すると解したとみられ、ロシア語訳はまさにその意の語を用いている。しかしここでの「づく」＝「軸」は、小車輪と車体をつなぐ支柱の意であり、広義の「軸木」を言うかと解される。(10ウー11オ〈車馬図〉を参照せよ)。上記引用文は恐らく大概による

卷之八対校表

通し 番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
1	1オ7	ナ	ナ	ナ	
2	々8	ナ	ナ	ナ	
3	1ウ7中	オロニ	オロニ	オロニ	D消しあとあり
4	々8上	ザカタ子	ザカタヨ	ザカタ子	
5	3オ8下	オストロ	オフトロ	オストロ	
6	3ウ1上	ボヤツツア	ボヤツツア	ボヤツツア	

記述とみなせるが、初めに「づく」の語を発した者が漂流民か、大概か。少なくとも後者は方言と了解した上での記述か、あるいは特殊なチームとして誤認した上での錯誤か。後世の校訂者もこれを尊重したのか、不明であるが、本稿では発音の訛りとみる。

今ひとつ言及すべきは、元来原本において書かれていなかった箇所が存在するという点である。その典型例は卷之九・29オ3(一) ガラフの服飾ハ上へに無地何色羅紗の「::」。(色)字の上の文字が空白になっている。右に小さく別筆で〈何〉とあるのは、筆写後の校正者によるものであろう。だが、恐らく原本において空白になっていたものと推量され、失念かあるいは質問せずにあつて後考を俟って一字あけておいたものとみられる。従つて、本文確定作業の際、元来空格がある場合もあつたことは念頭に入れておくべきものと考ええる。

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	通し 番号
17オ1上	16ウ7中	ク8中	ク7下	16オ6下	15ウ3上	ク8中	ク7上	15オ3上	ク7上	14ウ3上	14オ5上	ク	13オ5上	9オ1	8ウ6	7オ8	ク1下	丁・行・段
パロス	ペレツワ	シ <small>キマ</small> 席 ポスライ	パニヤ	サブロートー	ビヨースト	シペチ	ソーパ	コーハ	カベタン	サウダ	ポロクスケ	オセイツ	オラツ	弟 <small>デ</small> 「:」	蒙 <small>モン</small> 古 <small>コ</small>	果 <small>ミ</small> し	エノスタンノ	愛日本
パロス	ペレツワ	シ <small>キマ</small> 席 ポステイ	パニヤ	ザブロートー	ビヨースト	シペナ	ゾーパ	ゴーハ	カベタン	サウダ	ポロタスケ	オセイワ	オテツ	弟 <small>デ</small> 「:」	蒙 <small>モン</small> 古 <small>コ</small>	果 <small>ミ</small> し	エノフタ□ノ	D
パロス	ペレツワ	シ <small>キマ</small> 席 ポステイ	パニヤ	サブロートー	ビヨースト	シペチ	ソーパ	ゴーハ	カベタン	サウダ	ポロクスケ	オセイワ	オラツ	弟 <small>デ</small> 「:」	蒙 <small>モン</small> 古 <small>コ</small>	果 <small>ミ</small> し	エノスタンノ	I
																	D虫損	備考
																	D「ボ」の濁点「ム」	

通し 番号		丁・行・段	愛日本	D	I	備考													
42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25		
24オ4下	23ウ8上	々 双行左	23ウ5中 双行右	23ウ1中	23オ5下	々 下	22ウ2中	々 5上	22オ3上	20ウ1	々 5中	々 4中	19オ3 双行右	々 6下	17ウ3上	17ウ2中 双行左	々 中		
ウヱツソーカ	チャラレ	ホロシヨイト	前又	子、ケレプコ	ゴルボーカ	ソウエトーカ	禾	サツタラガ	ワリイノアレハ	用に	ベイチ	キリベイシ	ハニ 翻	バラカ	ゴーシテ	「:」チカと ハニ 榑			
ウヱツソーカ	チャテレ	ホロシヨイト	若又	子、ケレプコ	ゴルボーカ	ツウエトーカ	木	サフタラガ	ワリイノアレバ	用と	ベイチ	キリベイシ	ハニ 翻	パウカ	ゴーシケ	「:」チカト ハニ 榑			
ウヱツソーカ	チャテレ	ホロシヨイト	前又	子、ケレプコ	ゴルボーカ	ソウエトーカ	禾	サフタラガ	ワリイノアレバ	用に	ベイチ	キリベイシ	ハニ 翻	バラカ	ゴーシケ	「:」チカと ハニ 榑			

番号	通し	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
60		々7 双行右	崇 ^カ	崇 ^カ	崇 ^カ	
59		26ウ1上	モイポタレ	モイポタレ	モイポタレ	
58		々7中	ボラゴタリヨ	ボラゴタリヨ	ボラゴタリヨ	
57		々4中	ポリノ	ポリノ	ポリノ	
56		々3上	ゴノワボルノ	ゴノワボルノ	ゴノワボルノ	
55		々2 双行右	花面 ^{イモガキ}	花面 ^{イモガキ}	花面 ^{イモガキ}	
54		26オ1上	ボルノ	ボルノ	ボルノ	
53		々8中	ルーヒー	ルーヒー	ルーヒー	
52		25ウ4上	・ドロウ	ドロウ	ドロウ	
51		々6上	スポカル	スポガル	スポガル	
50		25オ5上	バラヒウ	バラニウ	バラヒウ	
49		々左	(欠)	将 ^ニ 消魂 ^{セント} フラル	将 ^ニ 消魂 ^{セント} フラル	
48		々	タイハ貸セ	ダイハ貸セ	タイハ貸セ	
47		々5上 双行右	将 ^レ 接	将 ^レ 接	将 ^レ 接	
46		24ウ4下	スワツハ	スワツバ	スワツハ	
45		々8下	子 ザボウイ	子 ザボウイ	子 ザボウイ	
44		々8上	スクワル	スタワル	スクワル	
43		々6下	ピラマ	ピラマ	ピラマ	
				ザシローシヤ 已 ^ニ 消 ^ス ザー	ザシローシヤ 已 ^ニ 消 ^ス ザー	

通し 番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
73	30ウ6	覚へける	覚へ来る	覚へ来る	Iにおいて他本の27丁、28丁が逆に綴じこまれている。
72	30オ6	質問	質問	質問	
71	29オ3	(欠)	ポマタ 髪に付る油也	(欠)	
70	々5下	ヒオロプノ	ヒオロプノ	ヒオロフノ	
69	28ウ2	ゼイライチ	ゼイライテ	ゼイライテ	
68	々8下	ポシトウ	ポシトウ	ポントウ	
67	々8上	なぜ	なぜ	なぜ	
66	々6	スモラレル	スモテレル	スモテレル	
65	々4下	ラーゴーレ	テーゴーレ	テーゴーレ	
64	27ウ2 双行右	咄	咄ナ	咄	
63	々6上	ウイチ	ウイナ	ウイナ	
62	27オ1下	チヨワスタイ	チヨワ スタイ	チヨワスタイ	
61	々8上	ゴシラ	ゴシテ	ゴシテ	

八 三本の比較と各本の特徴 愛日本(A)・旧伊達家本(D)・一関本(I)につき、冊数・各冊の丁数、挿図の有無と相違、洋字の問題、本文の異同等を検討してみたところ、それぞれ当該の表および注に示したような結果を得た。ここでは細部にわたる議論は割愛し、総合的な観点から三本を比較すると、次のような各本の特徴が浮上する。

愛日本(A)は『環海異聞』成立の翌年に(仙臺君)より下賜され

た本であり、さらにきわめて保存がよい。これらは特筆に値する。恐らく、大槻玄沢が藩に提出した原本から藩のしかるべき書写方の写しであり、従って字様がそれ風になっている。図も丁寧・細密に模写され、完備する。ただし、本文中や小図に若干の、時には意図的、時には不注意な欠落を有する。旧伊達家本(D)は、保存が良ければ、三本中最も重要な写本であろう。ただし玄沢提出時の原本にやや後の加

筆が認められる^(注19)。諸家が指摘するように挿図は圧巻で、描線・彩色もみごとだが、ことに人物の目が活写されている点は魅力である。残念ながら全体に虫損が激しく、おうおうにして本文にかかるのが、大きな難点である。一関本(Ⅰ)は『環海異聞』の周辺事情の一斑を明らかにする。かつ又、本文・図等の諸点において、全体として愛日本に近い。恐らく玄沢呈上の原本の控えとも考えられ、そうであれば、間接的に愛日本の特徴を考慮する上での証左ともなる写本である。

九 まとめとして 前述したように、三本とも全冊において毎半数末の文字は一致する。この点からしても、玄沢が藩に提出した原本の体裁は、全冊美濃判にして、〈序列附言〉一卷、巻之一から同十五まで本文十五巻、各巻に一冊をあて、計十六冊で一揃いであつたろう。毎半葉八行取り。挿図は公的に(一百十五)図^(注20)。本文字様は誤読を恐れ割合平易な字体を選んだと思われる。さらに、未処理の箇所をごく少数含んでいたと思われる。

結論的には大局的にみて三本にあつては本文中、文意を大きく左右する異文は存しないといつてよい。本文確定作業に際しては、愛日本と旧伊達家本が第一の資料となる。なお、例えば巻之十に存する(魯西亞當國帝夫婦肖像)の画質、換言すれば出来具合の良さは、本文の質の良さは一線を画して扱うべき判定基準であらう。多数の写本間での比較検討にあつては、ひとつの有力な目安となることは否めないが、善本間においては慎重にとり扱うべきものであらう。

さらに、流布に関し一言述べたい。成立後間もなく堀田正敦に貸し出された^(注21)『環海異聞』は、愛日本系のものなのか、旧伊達家本系のものなのか。いずれにせよ、伊達家・大槻家・堀田家に存した写本から、さらに筆写されて巷間に広がったと覚しく、概して二種に大

別される写本が流布したのであらう。

本稿では、『環海異聞』の本文確定に関し、愛日本が果すべき重要な役割につき、基礎的なデータを提供しえたと考える。よつて現在にあつては、最良の本文を得るためには、愛日本を中心に据え、これと旧伊達家本を対校しつつ作業を進めることが肝要である。

注

1. 『図書総目録』によれば五十セット以上伝存。なお、中村喜和(環海異聞の中心の人情 北棧開略と比較してみても) (なろうと) 五八号、二〇〇九年四月)、亀井高孝(足利学校本『環海異聞』について) (葦蘆葉の屑籠)、時事通信社昭和四四年)を参照。さらに滝沢馬琴が『環海異聞』を読んでいたことについては、杉本つとむ『馬琴、滝沢瑣吉とその言語生活』(至文堂、平成一七年)を見よ。
2. 今日迄の本文翻刻本等主なものについては参考文献Aを見よ。なお注5海野論文中に主な翻刻につき要領を得た対照表あり。
3. 函架番号、前者KD289-カ1-16・1-16、後者カタログ(注14を見よ)番号168。
4. 参考文献Aで示した諸書の解説、ことに池田皓(序文)(解題)を見よ。又、石山洋(『環海異聞』の成立をめぐって―大槻玄沢の海外事情研究の一助(参考文献B2所収)、さらに羽仁五郎訳註『クルーゼンシュテルン日本紀行』上・下(駿南社、昭和六年)を見よ。
5. 海野一隆(『環海異聞』の知られざる善本) (『東洋地理学史研究』日本篇)、清文堂、二〇〇五年)。初出は『日本古書通信』六〇巻一〇、一一号、一九九五年。
6. 木崎好尚(『愛日文庫図書目録』(大正八年)での番号)。
7. 大槻茂質(宝暦七(一七五七)―文政十二(一八二七))は、仙台藩医臣にして蘭学者。通称、玄沢、号、盤水ほか。志村弘強(明和八(一七六九)―弘化二(一八四五))は、仙台藩儒臣。養賢堂副学頭兼藩主侍講。通称、篤治、号、蒙庵ほか。

8. 筆者未確認。末中哲夫・楚上衛『愛日文庫目録』（大阪市立愛日小学校愛日教育会、昭和六一年）による。
9. 原本横書き二段。〈nok〉はオランダ語ではなく日本語の（目次）をローマ字風に綴ったものの省略か。〈Eind〉はいうまでもなくオランダ語。
ここでは衣服の仕立てを示す為、必要部分を展開できるようにした仕掛け。
10. 杉本つとむ編『大槻玄沢集Ⅰ』（早稲田大学蔵資料影印叢書 洋学編 第4巻、早稲田大学出版部、一九九四年）による。参照、吉田厚子（大槻玄沢『環海異聞』と北方問題）『日蘭学会会誌』第14巻第2号、一九九〇年三月。
11. 濱田直嗣（環海異聞、奥州名所図会、仙台東照宮御祭礼図、仙台藩美術資料等について）（平成16年度宮城県図書館貴重資料専門調査報告書）、二〇〇七年。筆者注、書名のルビは省略、又、次も参照せよ、内馬場みち子（伊達文庫蔵『環海異聞』のものがたり―資料の価値再発見の取り組みについて―）『叢知の杜』第6号、宮城県図書館 二〇〇九年。
13. この箇所に「図書総目録」宮城県図書館本では手島惟敏写とある。の記述があるが、誤認であろう。手島は宮内庁書陵部九冊本の写し手。
14. 「大槻玄沢生誕250年 GENTAKU」近代科学の扉を開いた人 二 関市博物館、平成十九年九月。
15. この大槻家蔵本が、現在複数存在する旧大槻本のどれにあたるのか、あるいは伝存しないのか、残念ながら未詳である。
16. 杉本つとむ他上掲書（底本（内閣文庫本）と（大槻本）の比較）以下も参照せよ。
17. 大友校訂本、宮崎編石井校訂本にみられる。なお池田皓（序文）参照。
18. 参考文献A8。
19. これが元来玄沢によるものか否かも不明。しかしおそらく成立後まもなくなされたであろう。
20. 『官途要録』によれば、松原石伸・山村才助。参照、岡村千曳（忘れられた銅版画家松原石伸）（『紅毛文化史話』創元社、昭和二八年）、鮎沢信太郎（山村才助）吉川弘文館、昭和三四年。後者に言及あり。
21. 吉田上場論文参照。

参考文献（*注で掲げたものは再掲しない）

- A 1. 石井研堂『校訂漂流奇談全集』博物館、明治三十三年
 2. 大友喜作『環海異聞』（北門叢書第四冊）北光書房、昭和十九年
 3. 宮崎栄一編『環海異聞』叢文社、昭和五十一年
 4. 杉本つとむ他『環海異聞 本文と研究』八坂書房、一九八六年
 5. 池田皓訳『環海異聞』（海外渡航記叢書2）雄松堂出版、一九八九年
 6. 山下恒夫再編『石井研堂これくしょん 江戸漂流記總集』第六巻、日本評論社、一九九三年
 7. В. Н. Горелый, Канкай ибун (удивительные сведения об окружающих морях) ; Терраль посльям, Словарь, АН СССР, Институт Азии, М., 1961
 8. В. Н. Горелый, Канкай ибун, «Удивительные сведения об окружающих [землю] морях»; Японская рукопись XIX в. из рукописного фонда СПб ИВР РАН, Институт Восточных рукописей РАН, СПб, 2009.
 - B 1. 杉本つとむ「江戸時代蘭語学の成立とその展開」IV・V 早稲田大学出版部、昭和五十六年、五十七年
 2. 洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』思文閣出版、一九九一年
 3. 田保橋潔『増訂近代日本外国関係史』刀江書院、昭和十八年
 4. 高野明『日本とロシア 両国交流の源流』紀伊国屋書店、一九七一年
 - C 1. 『通航一覽』第八 国書刊行会、大正二年
 2. 大槻如電『新撰洋学年表』柏林社書店、昭和三十八年再版
 3. 荒川秀俊『日本漂流漂着史料』気象研究所、昭和三十七年
- 〔謝辞〕 初めに愛日教育会の出崎俊雄、丸山悦治の両氏に感謝申し上げます。ことに丸山氏は献身的に愛日本全十六冊を撮影し、電子化して下さった。研究推進の為、全巻写真撮影を依頼して下さった末中哲夫先生にも御礼申し上げます。又、次の諸機関において貴重書を熟覧し、多くの方々のご協力を得ました。
- 愛日文庫、宮城県図書館、一関市博物館、国立公文書館内閣文庫、早稲田大学図書館、相馬美貴子、イサベル・田中・ファン・ダーレン
- なお、英文要旨はマーク・ピーターセン氏の校閲を得ました。以上記して、謝意を表します。